

## 「遺品」

副専攻（芸術の批評と創作）

法学部政治学科 4年

31652533 岡田直之

20年以上前の、古びたノートに書かれていた手記

別に意図したわけではないけれど、部屋の中には灰色の倦怠が渦巻いていた。日は高く昇ってしまって、それでも光がいつものように部屋に差し込むことはない。ゆらゆら動くのは閉じたカーテンと、隙間から見えるベランダの洗濯物。絡みつく湿っぽい空気は、荒れ模様の天気のせい。私がベッドに寝転んでいるから、視界は九十度横倒しになっている。倒錯した世界で、壁の時計は十三時を示していた。もう三限には間に合わない。朝ご飯も食べていないのに。

ゆっくりと体を起こして、顔を洗って、部屋の中に散らかった昨日の夕ご飯を片付けた。別に私たち二人とも大食漢ではないけれど、松屋の牛丼を持ち帰ると、思ったより食べた後のゴミがかさばる。昨日の夜は、私が一口食べただけでほとんど残してしまったから、なおさらだった。最近私じゃない私が牛丼を拒絶しているみたいだった。

部屋の中央に置かれたテーブルが一通り綺麗になってから、私はまたベッドにもぐりこんだ。エアコンをつけていたから、上にかかるブランケット一枚で十分快適だ。先輩はまだ、私の左隣で寝息を立てていた。私がうつぶせでスマホをいじりながら足をばたつかせていると、やがて寝ぼけた先輩が私の身体に腕を回す。この人はそういう癖があった。男にしては小さめの手。その手を私がゆっくり握ってやると、先輩は目を覚ます。

「裕子ちゃん、おはよう」

私は先輩を無視して、スマホでメッセージを返し続けた。右手は先輩の右手を握っているから、左手でフリックすると文字入力もたつく。先輩はしばらく私の背中をさすったり、頭を撫でたりしていたが、やがて勢いよく起き上がり、身支度を始めた。

「大輔さん、遅刻ですけど。学校行くんですか？」

「単位足りないからね。試験も近いし」

片足立ちで慌ててパンツをはいた先輩は、少しよろめきながら私の問いかけに答えた。レジュメだけでも取りに行くのか。私にはよくわからなかった。ワンルームの部屋は、男が一人いるだけで途端に使える面積が小さくなる。先輩は服を着て、冷蔵庫から常備してある天然水のペットボトルを取り出して鞆に突っ込むと、ベッドまで駆け寄ってきた。私はスマホをいじり続けていたけど、先輩は私の顎を持つと、くいと自分の方に向けた。決して整った顔立ちじゃない。むしろ雰囲気は重たくて、どこか話しかけにくい印象があるし、服のセンスもあか抜けない。私は黙って先輩の目を見つめた。先輩は一瞬身動きを止めて、目をそらした。なんだか、おびえた子供のような顔で。けど次の瞬間には、私の

おでこにくちづけをして、そのまま部屋を出ていった。「いってらっしゃい」を言う暇もなかった。

先輩と初めて寝たのは、そんなに昔の話じゃない。前のバイト先を辞めてから、正月ごろにたまたま選んだ塾講師の仕事。初めての出勤。そこで先輩は、右も左もわからない私に、教室のルールや授業のやり方を教えてくれた。大した内容じゃなかったから、すぐに雑談が始まった。同じ大学に通っているとわかってからは、割と打ち解けた会話ができた。先輩はすぐに口ごもるし、話し言葉の中にやたら書き言葉が混じるから、人づきあい苦手なのはすぐにわかったし、事実話にくい人だと思っていたけど、趣味や好きな食べ物に思いのほか似ていた。松屋の牛丼なんて安っぽい好み、馬鹿にされると思っていたけど、先輩は「俺も好きなんだよ、牛丼」と言って、ケタケタ声を上げた。

その日のバイトが終わった後、一緒に近くの松屋で牛丼を食べた。私は大盛、先輩は並盛だったから、そこでも二人で笑ってしまった。

食事の最中、先輩は私が新しいバイト先の近くに住んでいることを聞いて、驚いた。

「え、裕子ちゃんこの近くで一人暮らししてるの？ 日吉に住めばいいのに」

「そんなに裕福なわけじゃないんで、家賃が安くて交通の便が良いところに住むことにしたんですよ。三田も行きやすいし」

へえ、と言って先輩は牛丼に向き直った。しばらく口に食事を運び続けて、お互い無言になった。やがて丼の中が空っぽになる頃、私は沈黙に耐えきれなくなっていた。趣味のネタは使い果たしていたし、なんとかひねり出した糸口が連絡先だった。

「あの、教室のグループトークに入れて欲しいんですけど」

そう断ってから携帯を差し出すと、先輩は少し驚いたような様子だった。けれど、自分も無言で携帯を取り出して、私と連絡先を交換してくれた。

それから業務のことや日々の取りとめもないことをメッセージでやり取りするようになった。先輩の態度は堅苦しい部分があったけど、夏が近づいてくるとフレンドリーな部分も出てきて、私の前では良く笑うようになった。一緒に映画を見に行ったり、深夜の日吉でお酒を飲みながらうろついたりもした。春の陽気は寒すぎず暑すぎず、屋外でお酒を飲むには最高だ。これは先輩が教えてくれたことだった。先輩は見た目からは想像できないけど、意外と規律や規範を無視する人だった。何度目だったか、日吉の路上でいっぱいお酒を飲んだ後に私の家になだれ込んで、そのまま流れで関係を持ってしまった。

「裕子ちゃんって、誰とでもこういうことすんの？」

ことが終わって、二人でベッドに寝そべっている時、先輩から飛んできた一言目がこの質問だった。酔っぱらっていたし、少しくらいの失礼は許してやろうと思ったけど、腹が立ったことも事実だった。

「その質問だと、私が軽い女みたいじゃないですか。そんな女じゃないですよ、私」

私はあえて、普段しないように、ちょっと語気を強めていってやった。天井の蛍光灯を

見つめながらの返事だったけど、隣で先輩が体を縮めるのがわかった。

「いや、軽い女とは思ってないけど、バイト先で他のやつらともかなり親密に会話してるし、なんていうか、」

私は言葉を遮るように寝返りをうって、先輩の薄い胸板にうつぶせで、身体を密着させた。そのまま手を先輩の頬に伸ばして、ゆっくりと撫でる。先輩は無言で、身体を全く動かさない。私はそのまま手を先輩の首までスライドさせて、軽く締めてやった。

「先輩、童貞だったでしょ。さっきまで」

不安なの？ そう茶化してやった。

途端に、先輩の首にかけていた手が払われた。先輩は半身を起こして、私は先輩に背中を抱きかかえられるような形になった。先輩は怯えと、羞恥と、屈辱と、そして少しの興奮が入り混じった、ぐちゃぐちゃな顔で私を睨みつけた。そのまま私は先輩に押し倒されて、蹂躪された。先輩が怒りらしき感情を見せたのは、この時が初めて、それ以降見ていない。けれど私はそういう、何かをこらえて生きている、ガラス細工みたいに繊細な男の人を見るのが好きだった。次の朝、裸のまま必死で謝ってくる先輩に、いっぱい甘えてやった。

夏が来る頃には、私たちの関係はすっかり爛れていた。先輩は私の部屋にずっといて、食べて、絡み合って、寝て、起きて、食べて、絡み合っただけの生活リズムができていた。お互いに「付き合おう」とは言いださなかった——先輩は、もしかしたらそういう明確化を期待していたのかもしれない。けど私は、そうする気はなかった。二人の世界に名前を付けたくなかったし、先輩が私に逆らうことはないだろうと、心の中でわかっていたから。そうやっておごっていたから、最後に私は報復を受けたのかもしれない。

眠くて眠くてしょうがないのをこらえて、教室で授業をしている。体もなんだか熱っぽい。ここ最近ずっとだ。これは風邪をひいたかな？ と思うけれど、新しい服を買ったり、友達や先輩と遊びに行ったりするお金が少し乏しいから、途中退勤するわけにもいかない。

教室には講師の控室があって、そこには冷蔵庫や電子レンジ、ソファなど少しはくつろげる備品が用意してある。喫煙所は外にあるけれど、煙草を吸う人がいるから、わずかにバニラの香りもする。そんなことまで前は気にしていたっけ？ ともかく、次の授業までの休憩で、15分の仮眠を取ろうと思った。ふらふらしながら控室のソファに倒れ込んだ。……しばらく眠れないまま目を閉じていると、よく通る声が頭上からふってきた。

「次の授業、替わってやろうか」

目の前に立っていたのは若林だった。今の私は視線が低いから、若林が天井に届きそうな長身に見えるけれど、誇張ではなく彼は本当に体が大きい。それに、針金のような細長さではなく、ちゃんと骨格の周りに然るべき筋肉がついている。そういえばこいつも体育会だったっけ？ 日吉によくうろついている、腕一本で人を殺せそうなアメフト部、とま

ではいけないものの、彼は十分筋骨隆々の部類だった。

「いや、いい」

「そんなフラフラでどうやって生徒の前に立つんだよ」

ごもっともだったが、私は若林に借りを作りたくない。少し前に、彼から交際を迫られたことがあった。話すようになって一週間もしないうちに。軽い人だなと思った。その時は上手くかわしたけど、それ以降なんとなく若林と会話するのを避けている。もっとも、彼はそんな私の気持ちとお構いなしに、私に話しかけてくる。

「それとも、柳町さんに来てもらうか？ どうせお前の家に入り浸りだろ？」

「……なんで知ってんのよ」

気だるさを押しのけて、私はなんとか立ち上がった。それでも若林は私より、頭一つかそれ以上背が高い。精一杯の虚勢を張って、若林を睨みつけてやった。けれど威圧感が違った。心がすくむ。

「なんだ、ホントに柳町さんとそうだったのか。一緒に帰るのをよく見てたから、ひょっとしてと思ったけど」

随分頭が回ってないんだな。俺にころっと騙されて。若林は口にこそしなかったけど、そう言いたげな心の裏側が透けて見える、いやらしい笑いを浮かべていた。

「別に付き合ってるわけじゃない。……ねえ、次の授業があるから、どいてほしいんだけど」

よろめきながら若林の横を通り過ぎて、私は控室のドアノブに右手をかけた。次の瞬間、手首を若林の大きな手にがしっと掴まれた。若林は、腕がへし折れるかと思うくらい強く力をこめてくる。動けない。彼の巨体がゆっくりと後ろに迫ってくる気配がした。体が動かなくなって、ずるずると力が抜けていく。なぜか、一人暮らしの部屋でゴキブリを見た時のことを思い出していた。ベッドのすぐ横の壁に、黒光りする虫はいざり出てきたとき、私は声を出すことも逃げ出すこともできなかった。気持ち悪い。何が起きている？ 天井に向けて斜めで真っすぐな動線を描いたゴキブリはやがて、ベッドの下に再び潜っていった。今、私はそれを目で見ることができない。けれど私の後ろには、確かにゴキブリがいる。私を汚そうとしている、人の形をした人じゃないイキモノ。

「調子こいてんじゃねえぞ」

ゴキブリは私の左耳に口を近づけて囁いた。生暖かい息が耳穴を通して脳髓を舐めまわしてくる。しかも臭い。汗と男の臭気はこんなにも鼻につくものだったか。吐き気を催した。けれど、あいた左手を口にあてがうこともできない。助けてと目いっぱい叫びたいが、それもできない。

「見た目がいいからって調子乗りやがって。柳町さんはショックだろうなあ、自分が入れあげてる女が、言い寄られたら誰とでも寝る公衆便所だったなんて」

言葉の一つ一つが私の心のトゲを刺激していく。もう覚えていないはずだった記憶。知られたくないひみつ。夜な夜な違う男と過ごした日々。うんざりして逃げてきた大人の世

界。背後のゴキブリは現在の私だけではなく、過去の私も踏みつけ養分にしていく。カサカサと不快な音で喋る。それが私の胃袋を洗濯機の中身みたいにぐるぐるかき回して、ひどい気分させてくる。時間の感覚が遠のいていく。このゴキブリは暴力だ。女をモノか何かと勘違いしたコイツはただの暴力だ。生き物ですらない。そんな生き物がいてはいけない。けれどああ、そんな暴力に逆らえない私はなんて弱い存在なんだろう。私はとうとう、自分が女に生まれたことを呪い始めた。子供なんて絶対いらぬのに。どうして神様は女の身体を、か弱くて贅肉の付きやすい構造にしたのか。男だったらこんな暴力に逆らってやるのに、どうして私がこんなに惨めな思いをしなくてはいけないのか。

額から汗が玉になって滴り落ちたころ、若林は腕を後ろに振って、私をソファの方にほうった。どうすることもできず、私はソファの前に座り込む。吐き気で一步も動けなかった。

「せいぜい童貞食って満足してろ」

捨て台詞を吐いて若林が出ていった瞬間、私は近くにあったゴミ箱を手繰り寄せて、腹の中身をぶちまけた。二度も三度も波は押し寄せてきて、まるで全身が雑巾になって誰かに絞られているみたいだった。悔しくて唇をかんだけど、涙を流したら負けだと思った。

自分の家で横になって天井を見ていると、それまでの出来事が夢だったんじゃないかと思えてくる。でも私の右手首に残る赤い痕は人の指の形をしていて、そんな淡い希望を塗りつぶす。夜の雰囲気では私に気持ちが滅入る。思い出したくないことを思い出してしまう。若林に言われるまでもなく、私は自分の過去と向き合うことを避けていた。それが先輩を傷つけることになるかもしれないと思って、自分から口に出すことはなかった。イヤに決まっている、そんなこと。自分の中にずぶずぶと沈み込んでいって、私はまた胃の中身を外へ出したくなってきた。頭を浮かせる熱は全く引く気配がない。私が生活している部屋の中にいるのに、生ごみやトイレ、自分がまき散らしてシーツに染み付いた交わりの匂いさえ嫌悪感を生み出す。私はどうしてしまったんだろう。

体にかけていたブランケットをきつく握りしめた瞬間、ガチャガチャと鍵の開く音がした。扉が開くと、先輩が入ってきた。ラフな格好をして、片手にはビニール袋を提げていた。覗いているのは松屋のロゴマーク。

「大丈夫？ パイトはや抜けしたって聞いたから。体調悪いの？」

優しい声で先輩は問いかけた。私はつい、壁の方に寝返りを打って先輩に背を向けてしまった。牛丼のにおい……ライン生産された既製品のにおい。昔はあんなに好きだったのに、今ではちっともほしいと思えない。それに、自分でもショックだったけど、先輩からも若林と同じ男の臭いがして、私じゃない私が何かを拒んだ。

「まあ、なんとかなってます」

「そっか。ほら、牛丼食べようよ。最近裕子ちゃんあんま食べてないけど、ちょっと食が細すぎて心配だよ」

先輩はベッドの近くに胡坐をかいて座ると、テーブルに牛丼を二つ並べて置いた。それは音と気配でわかった。私はもう、耐えられなくなっていた。

「あの、大輔さん。私今日は牛丼要らないです」

「いや、風邪ひいて寝込んでるんだったら栄養付けた方が良くない？」

「それにしたって牛丼ってチョイスはないじゃないですか」

「好きだって言ってたしいっぱい食べてたよね、前に」

「それとこれとは話が違いますから」

「裕子ちゃん最近少し変だよ、前はあんなに嬉しそうに食べてたのにどうしちゃったのさ」

「いいから、要らないっていつてるでしょ！」

私はベッドの上で立ち上がって床に降りると、テーブルに置いてあった牛丼を掴んで持ち上げ、先輩の目の前でそのまま上下逆さまにひっくり返した。白いご飯が勢いよく、穴の開いてないバウムクーヘンみたいな状態で、肉の上に乗って落ちてきた。テーブルの上で牛丼だったものが水音を立てて、汁がびちゃびちゃと部屋の中に飛び散った。先輩の着ていた服にもかかった。私たちは先輩が帰ってきてから初めて、目と目で見つめ合った。知らない感情が先輩の顔に浮かんでいた。今にも泣きだしそうな顔をして、真一文字に唇を結んでいる。

「嘘だったんだね、最初から全部」

先輩も、ゆっくりと立ち上がった。若林ほどじゃないけれど、先輩もそこそこ背は高い。私は先輩の顔を、今度は見上げる形になってしまった。

「これ、若林が見せてくれたんだ」

そう言って、先輩はスマホを取り出し、私に突き付けた。画面に映し出された写真に写っているのは一年前の自分。先輩が指でスクロールして見せる。思い出せない男と抱き合っている私、思い出せない別の男と足を絡ませている私、また別の思い出せない男と夜のホテル街を歩く私。顔から血の気が引いていくのを感じた。胃の中で台風が暴れまわって、卒倒しそうになる。

「俺が扱いやすい男だったから、好きでもない食べ物の趣味を合わせてたんだろ。軽い女じゃないって言ったのも嘘だった。裕子ちゃん、君は俺を裏切ったんだ」

違うと言いたかったけれど、頭の中で大地震が起きているみたいでまともにしゃべれなかった。違うんです、今は牛丼を食べる気分じゃないだけで、本当は大好きなんです。私だって牛丼食べたいんです。でもダメなの、今まで私が愛してきた何もかもを私じゃない私が拒んでいるの。それは先輩、先輩だって例外じゃないのが、私はそれが一番悲しいの。

崩れ落ちる砂の城みたいに、私はその場でボロボロになってしまった。先輩はさよならも言わずに、私の空間から出ていこうとしている。行かないでの一言が喉から出なかった。代わりに胃袋の中身が出てこようとしたので、私はむしろ手で口を押えてしまった。

あれ、私はそんなに、引き留めようとするほど、先輩のことを必要としていたっけ。

扉を荒々しく閉じる音が聞こえて、私は一切が終わったことを悟った。「どうしちゃったの」なんて、先輩に聞かれても、私が一番よく知っているようで、実は知らなかった。

#### 遺品整理

古びたノートに綴られた文を読み終えた娘は、そっとそれを段ボールの中に仕舞った。思い出の品と呼べるようなものは数少なかった。物持ちの良い人ではなかったし、昔を振り返ることも嫌いな人だった。このノートは数少ない、その過去を記したものだ。そしてノートのおかげで娘は今ようやく、顔も見たことのない父親と、口数の少なかった母親の真実を知ることができたのである。